

令和四年度

岡山白陵高等学校入学試験問題

国語

受験 番号	
----------	--

注意

- 一、時間は六〇分で一〇〇点満点です。
- 二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
- 三、開始の合図があつたら、まず問題が一ページから二三ページまで、順になっているかどうかを確かめなさい。
- 四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

少し<sup>①</sup>チュウシヨウ的ない方になりますが、私たちが「経験」をするためには、意識するとせざるとにかかわらず、① 経験のための方法ないしは形式をあらかじめ身につけていなければなりません。

たとえば、なかなか日常では気づかないことですが、風景を見ると、私たちは知らず識らず遠近法によって見ています。今日、世界のどの国の人であれ、いわゆる一点消去の遠近法なしには何も見えてきません。ものを見るとは、じつは遠近法を實行していることと同義なのです。もし遠近法を知らない人が風景を見るとすれば、今日の私たちが見ているようには世界は見えてこないはずです。

しかし、いうまでもなく、この遠近法とは、十四、五世紀、ルネサンス期のイタリアで発見されたものであって、太古からつづく人類永遠の知恵ではありません。一群の天才たちが発見し、多くの人々がそれに従ったものを見ているうちにいつしか身につくとき、ものの見方の基本となったのです。

この場合、遠近法というものの見方は、風景を見るという経験に先んじてあります。擬声語を例にすれば、話も少しわかりやすくなるでしょう。世界のどの言語にも擬声語があります。そのさい、たとえば鶏が「コケッコ」と鳴くか、あるいは「コツカドウドウルドゥー」と鳴くかは、じつは文明の中でつくられたものの見方（聞こえ方）にほかなりません。地域によって、文明によって、聞こえ方はそれぞれ異なる。つまり、擬声語は個々の経験に先んじて私たちの体のなかにあるものであって、それを身につけると、不思議なことに、自然の鳥の鳴き声があたかもそのように聞こえてくるといふ仕掛けなのです。

もう一つ次元を高めていえば、たんに経験を積み重ねただけでは、世界を自然科学的にみることはできません。物理や化学についていえば、すべての現象を数の関係に置き換えて、はじめてそれは可能になります。イタリアのガリレオ・ガリレイ（一五六四～一六四二）が「自然というものは数で書かれた書物である」といったように、数の関係を経験に先んじて知っていなければ、物質の世界は自然科学的には見えてこないのです。

もし教育とは何かと問われれば、遠近法や擬声語や数の関係にとどまらず、経験に先んじてある方法を教える行為

だといえるでしょう。べつの表現をすれば、教育は経験を離れる必要があるということなのです。

こう考えてみれば、学校の教室というものが現実の社会から独立した世界、つまり閉じられた世界として存在し、その知識の八、九割までが言葉によって与えられていることの理由は明らかでしょう。もちろん、学校が閉じられた世界となるのは近代に入ってからのことでした。しかしながら、後に改めて詳しく論じますが、<sup>②</sup>この近代が達成した成果は、じつは長く教育の歴史のなかで用意されていた、あるいは芽生えていたものなのです。

① 私たちにとって、学校教育はなぜ必要なのか。べつのいい方をすれば、それぞれの実生活の経験の積み重ねにまかせるのではなく、なぜ教育のための特別の場所が必要なのか。この問いかけにたいしては、いくつかの理由が考えられます。

第一に、これはわかりやすい理由ですが、世界はあまりにも広く、私たちがそのすべてを経験することはできないからです。

しかも、私たちが「世界」と呼んでいるものの多くはすでに失われた過去であり、「現実」と呼んでいるものの半ば以上は現実には存在しません。歴史と呼ばれ、人類の記憶のなかにしかないものがほとんどでしょう。新聞やテレビで伝えられる世界はすでに「昨日の現実」にすぎないし、学問研究の保証する真実の世界も、結局は過去に見えられ、歴史のなかで再確認されてきたものであるはずです。

経験は記憶によって濾過され、それと照合されて、はじめて経験として完成される。そうした<sup>③</sup>経験の完成の場所として、私たちは教育の営みを発明し、教室という別世界を囲い込んでいともいえるのです。

森鷗外の短編小説『サフラン』に、サフランをめぐる若き日の思い出話が出てきます。この植物の名は本で早くから知っていたけれど、まだ実物を見たことがない。そこで蘭医であった父親に頼み、薬箆<sup>だんす</sup>の抽斗<sup>ひきだし</sup>から「ちぢれたような、黒ずんだ物」、つまり乾燥したサフランを出してもらう。「名を聞いて人を知らぬと云うことが随分ある。人ばかりではない。すべての物にある」といった感慨を綴った小品ですが、考えてみれば、われわれがいうところの「現実」とは、半ば以上、森鷗外における「サフラン」のようなものではないでしょうか。

第二に、教育が不可欠になるのは、私たちが何らかの現実行動をうまくなしとげるためには、行動をいったん棚上げし、目的を括弧のなかに入れて行動しなければならぬからです。いいかえれば、現実行動にあたって失敗を避け

るには、まずもって④「練習」をしなければならぬ。経験を離れることがいかに重要かは、この練習というものを考えれば誰しも納得がいくはずだ。

音楽や絵画のような芸術であれ、スポーツであれ、碁や将棋といった勝負事であれ、さらには実践的なすべての営みが、まず練習を要求しています。野球選手のバットの素振りが好例でしょう。飛んで来てもいないボールを相手にバットを振っている。そのことによって、彼はバッティングという行為のプロセスを意識し、そこからプロセスを支える「型」を身につけようとしているわけです。

私たちの行動能力は、単純な経験をいくら繰り返しても、けっして高まることはありません。現実行動は練習のうへではじめて成り立ちます。どんな技術であれ、技術を⑤クシするプロセスを絶えず見直し、身につけ直さなければならぬのです。

学校というものは、その意味で、あらゆる知識を現実行動からいったん切り離し、その行動のプロセスを教える場といってもいいでしょう。要するに、教室は行動の場ではなくて、練習の場なのです。

第三に、第二の理由の延長になりますが、私たちが行動するためには「型」を持たなければならぬということがあります。

武術一つを取り上げても明らかでしょう。刀をただ振り回していれば強くなるというものではない。面を打ち、籠手を打ち、突きを入れるという型をまず身につけ、それがまるで無意識であるかのように流露してくるところに武術は成立します。

日常の作法もまた同様でしょう。これもまた一つの型であって、日常生活はその枠組みによって支えられています。人間、悲しいときにはなりふりかまわず泣きたくなるものですが、そこに悲しみの型が入ってきたとき、はじめて私たちは悲しみに耐える能力も身につけることができるのです。

の短編小説『手巾』に、息子を亡くしたばかりの婦人が端然と息子の恩師に相對しながら、しかし机の下では「膝の上の手巾を、両手で裂かないばかりに緊く、握っている」という場面があります。つまり、「顔でこそ笑っていたが、実はさつきから、全身で泣いていたのである」とあるように、彼女は「息子を亡くした母」という型を、あるいは役をその場で演じることによって、身も世もない悲しみに耐えることができたし、また⑥シユウタイを

さらさず済んだわけです。

教育が必要な理由の最後は、多くの知識が経験から直接に学べないからです。

現代の先進社会の人間ならば、誰でも地動説が正しいと知っています。しかし、誰一人として地球が太陽の周りを回っているのを見た人もいなければ、その動きを実感した人もいない。日常では、太陽が朝は東の空に上って、夕方は西の空へ沈む。昔の人も現代人もそれを経験上知っています。しかし、真実はそうではないということを、知識として身につけているのが現代人でしょう。

また、幾何学で教わるかたちというものも見ることにはできません。幾何学上の「点」は大きさがなく、位置のみあるものだとくらいわかれても、それを目で確かめることはできない。二点間をつなぐものが線であり、厚みのない広がりがあるといわれても、これまた誰も経験することができない。しかし、こうした知識が、現代の自然科学、あるいは現実認識の <sup>①</sup>キソをつくっているのはいうまでもないことです。

(山崎正和『文明としての教育』による)

問 1 〓 線部①②のカタカナを漢字に直せ。

問2

線部① 「経験のための方法ないしは形式」の特徴として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 生活の中で意識的に用いている。
- イ 人間の知恵として太古からつづいている。
- ウ 経験を積み重ねて獲得している。
- エ 経験から離れた知識によって説明されている。
- オ 過去のもものとして大半が失われている。

問3

線部② 「この近代が達成した成果」とは何か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア ルネサンス期の、イタリアの天才たちによる偉業。
- イ 現象を数の関係に置き換えた、自然科学の発展。
- ウ 文明のなかでつくられた、洗練されたものの見方。
- エ 先に経験して、そのやり方を身につけていく画期的な学習法。
- オ 効果的に知識を教えるための、社会から独立した学校。

問 4

——線部③ 「経験の完成の場所」とはどういう「場所」か。これについて説明した次の文章の I

II を指示に従って埋め、説明を完成させよ。

個人が経験した過去の出来事は、記憶を通じて I 五字以内で考える I が取り除かれる。その後、歴史の中で他の経験と照らし合わされることで、それが II 五字で本文から抜き出す II として再確認されることになる。こうして経験は人類が共有する知識として完成される。そして、それらが集積しているのが教室という「場所」である。

問 5

——線部④ 『練習』とあるが、ここではどういうことか。わかりやすく説明せよ。

問 6

——線部㊦「私たちにとって、学校教育はなぜ必要なのか」という問いに対して、筆者はどう答えているか。百字以内で要約せよ。

問 7

□には、日本の文学者の人名が入る。その文学者について書かれた次の文を読んで、後の選択肢から正しいものを一つ選び、記号で答えよ。

二十四歳の時に発表した『鼻』が夏目漱石に激賞され、文壇に華々しく登場したこの人物は、古典作品から材を得た『羅生門』の他に、『杜子春』や『トロツコ』など、数多くの作品を残している。

ア 芥川龍之介

イ 島崎藤村

ウ 川端康成

エ 太宰治

オ 三好達治

(このページに問題はありません)



次は、河崎秋子の小説、『頸、冷える』の一節である。この文章を読んで、後の問いに答えよ。

北海道の東部に住む孝文は、亡き父のあとを継いで、丹精込めて育てた毛皮用ミンクを毛皮工房に売って生計を立てている青年である。孝文の元には、近所の酪農家の子である久美子（小学四年生）と修平（小学一年生）がよく遊びに来ており、孝文はこの姉弟をかわいがっていた。ある秋に、孝文は毛皮の魅力を伝えたい思いから、この姉弟にミンクの毛皮でできたキーホルダーをプレゼントした。すると二人は大変喜んで家に帰っていった。

久美子と修平は、その後しばらく孝文の家に遊びに来ることはなかった。霜で地面が乾き、根雪が地面を硬く占めてはじめて、とミンク小屋にやってきた。足取りが重いだけでなく、どこか顔が暗い。

「あれ。前にやった、ミンクのキーホルダー、どうした？」

「あ、あれね」

目を合わせないまま、久美子はばつが悪そうに下を向いて言った。

「あたしの、黒いやつは、ばあちゃんに捨てられちゃったの」

「捨てられた？」

彼らの祖母はいつも自室に籠っており、孝文は直接会った覚えがない。二人の話から推測するに普通の人だと思っていたのだが、人から貰った物を捨てるとはどういうことなのか。疑問に思っていると、久美子はさらに暗い声で呟いた。

「毛皮のものなんか、持っちゃ駄目だって。ろくでもないって」

ろくでもない。思わぬ言葉の強い意味に、孝文の思考は凍りついた。取り繕うように、修平が「あ、でもね」と無理に明るい声を出す。

「ぼくの白いのはね、しまつてあるから大丈夫だよ」

①「ねえ兄ちゃん、猫の木って知ってる？」

顔を上げた久美子が、ふいに奇妙なことを訊いてきた。その目にはある種の怯えのような揺らぎが宿っている。

「いや。知らない。何さ、猫の木って」

「戦争やってる時、ばあちゃん、<sup>⑧</sup>ケンペイさんと村長さんの命令で、飼ってる猫ば差し出したんだって」

戦争の時。この子達はまだ産まれていない頃。孝文の父親が、大陸で戦っていた頃のことだ。

「どこさ、それ。ばあちゃん、どこ出身だの」

「札幌の近くにあるナンタラっていう集落だって言ってた。猫とか犬、神社の前にある広場に全部連れて来させられて、みんな殴って殺して毛皮にしなきゃいけなかったんだって。お国のためにつて。兵隊さんの服にするんだって」

◎お国のために、兵隊さんの服。そのために毛皮を。孝文の背をぞわりと寒気が這うが、久美子の話を止められぬま

ま、耳を傾けた。修平も下を向き、拳を握り締めてそれを聞いている。

「でも、犬だと紐引つ張つてくから大丈夫だけど、猫は無理矢理に籠に押し込んだり、抱っこして連れて行ったから、逃げたりするの。ひょいって。その猫達が境内の木に登っちゃったんだって。何匹も何匹も。木の上のほうに登って降りて来ないの。飼い主も、ケンペイさんも、みんな下で『早く降りて来い』って怒鳴るから、よけいに猫は降りて来ないの」

「ばあちゃんの猫も、その中にいたのか」

「うん。可愛がつてる三毛だったつて。それが、猫の木に登って、絶対に降りて来なくて、そのままになったつて」

「⑨そうか……」

孝文も聞いたことはあった。戦争中、子どもから老人までもが神国日本の勝利を信じて已まず、釜から釘まで何もかもを差し出すよう要求されていたあの時代に起きていたことを。学校や各家庭ではウサギを飼育することが推奨されていた。あの、ふわふわで柔らかく可愛らしい生き物をなるべく多く繁殖させ、飼育せよとの号令が下された。肉は食料に。そして毛皮は北の戦線で戦う兵士たちの戦闘服に使われていたのだという。

実際、孝文の父親はシベリアの戦線に送られた際、北海道の冬など「糞ほどの比較にもならない」ほどの寒さの中、毛皮を内側に張った上着のお蔭で自分は生き延びられたのだと信じていた。

「⑨そうか……」

「分かるか、孝文。寒い冬の朝、鼻毛が凍るだろう。でもシベリアではな、鼻毛だけでなく眉毛も睫毛も全部凍る。そして、歯が痛くなるんだ。口を閉じていても、面の皮ごしに骨も歯も冷えていく。ありやあ参った。前歯が凍ったみてえになって、ずきずき痛むんだ。虫歯でもねえのに。でもそんな時、上着の襟を引つ張って、顔に当てんだ」  
温かく燃えるストーブの近くで、僅かな酒を舐めながら、それでもどこか楽しげに話していた父親の姿を孝文は思出す。

「襟の内側には動物の毛皮が張ってあった。ありや、何の毛だったんだろうな。ミンクでないのは確かだけど、柔らかくて、あったかくてなあ。そんな時、その毛皮が当たった部分だけは、シベリアの寒さも敵わなかった。結局、俺達は戦争に負けたよ。完膚なきまでってやつだ。外国にも、日本国民全員が望んでた未来にも負けた。でも、俺の襟は、毛皮がついたあの襟だけは、シベリアに負けなかったんだ」

父は、戦線で嫌になるほど見たであろう血の話はしなかった。積み上げられたという敵味方の死体の話をしなかった。ただ、<sup>②</sup> 自分の首元を温めてくれた何かの獣の毛皮の話ばかりをしていた。

終戦を迎え、ぼろぼろになってシベリアから帰還し、孝文と再会してミンクの養殖を志した父の動機はその戦時体験に根があったのだろう。だがその因果関係が直接彼の口から語られたことはない。

それでも、その仕事の真摯さと誠実さ、そしてミンクを扱う際の丁寧さから、孝文は父親を尊敬し、その技術をしつかり学ぼうと努めたのだった。父が信じた道だ。生業として選んだ職業だ。孝文の中に迷いはない。<sup>③</sup> そうありたかった。

「ばあちゃんかね、キーホルダー見て、言ったの。戦争も終わったつてのに、毛皮の為に動物を殺生するなんてろくでなしだ。もう遊んだらいけねえつて」

「ねえ姉ちゃん、いいよもう、やめよう」

「戦争終わったのに、もう猫の皮剥がなくていいのに、剥ぐために動物飼う意味はないつて」  
どん、と、音が先に響いた。

頭で考えるより先に、拳が手近な壁を殴っていた。久美子と修平が体を強張らせる気配があったが、見ることはで

きなかった。孝文は下を向いたまま、低い声で唸るように口を開く。

「⑤ なんも、婆さんも、お前らも、なんも知らねえ癖に、何様だの」

子ども相手だ。止める。心の中で制止を促す声が聞こえたが、暗い声が喉から湧き出るのを止められなかった。

「偉そうなことを言つて。乳や肉とるのに牛ば飼うのと、毛皮とるのにミンク飼うのと、どこの何が違うつちゆうんだ！」

語尾が荒ぶった直後に、二人は小屋の外へと駆けだした。しまった、と火照った頭が冷水をぶっかけられたように冷え、彼らを追う。開け放たれた戸口から外に出ると、久美子と修平が自宅への道を走っている背中が見えた。風に紛れて、二人分の泣き声が聞こえてくる。

「…ろくでなし、か…」

急に全身が力を失い、孝文はその場にしゃがみ込んだ。血がうまく回らない頭の中で、過去に生きた人間の価値観と自分の信念とがぐるぐる回る。④ いくら考えたところで答への尻尾を捕まえられるはずもなく、風はなお冷たく吹き付けた。

(注1) 「その後」……孝文が久美子と修平にミンクのキーホルダーをプレゼントした後。

(注2) 「根雪」……長期積雪。

(注3) 「戦争」……太平洋戦争。この小説内では、戦後十五年が経過している。

(注4) 「ケンペイ」……「憲兵」のこと。太平洋戦争中、全国に配備され、主に治安維持にあたった。

問1 本文中の  に入る言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア せかせか      イ ずかずか      ウ おめおめ      エ こそこそ      オ とぼとぼ

問2 線部「ばつが悪そうに」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 不機嫌そうに      イ 気まずそうに      ウ こわそうに  
エ 悔しそうに      オ 悲しそうに

問3

——線部①「ねえ兄ちゃん、猫の木って知ってる？」とあるが、久美子はなぜ「猫の木」の話をはじめたと考えられるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 「猫の木」の話聞き、毛皮の生産を生業にしている孝文をなじろうと思ったから。
- イ 「猫の木」に話題を変えて、キーホルダーの件で孝文に怒られないようにしたいから。
- ウ 「猫の木」について知り、その知識を孝文にひけらかしたいと思ったから。
- エ 「猫の木」の話で、祖母がキーホルダーを捨てた理由を伝えようと思ったから。
- オ 「猫の木」の話は、祖母の戦争体験として後世に語り継いでいくべきだと思ったから。

問4

——線部②「自分の首元を温めてくれた何かの獣の毛皮の話」とあるが、この話から孝文は、毛皮のどのような点を、その良さとして感じ取ったと考えられるか。説明せよ。

——線部③「そうありたかった」とあるが、このとき孝文はどんな思いでいるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 猫の木の話を聞いて、自分の仕事の残酷性に目を向けざるをえなくなり、自分の信念に揺らぎが生じてしまったが、それでもまだ自分は正しいことをしていると信じたい。

イ 猫の木の話を聞いて、自分の仕事はむごたらしいと感じ、久美子たちの心を傷つけていることを情けなく思ったが、それでもまだ毛皮の良さを分かってもらえると信じたい。

ウ 猫の木の話を聞いて、自分の仕事は世間に全く受け入れられていないと感じ、この仕事をよしとする自分の倫理観に自信がなくなったが、それでもまだ自分は真つ当な人間だと信じたい。

エ 猫の木の話を聞いて、自分の仕事は前時代的で将来性に欠けていると思い、父のあとを継いだことを後悔したが、それでもまだこの仕事で豊かな生活が送れるようになると信じたい。

オ 猫の木の話を聞いて、自分の仕事は本心からやりたいことではないと気付き、今まで仕事に費やした時間を無駄に思ったが、それでもまだ自分の仕事には何か魅力があると信じたい。

問6

——線部④「いくら考えたところで答えの尻尾を捕まえられないはずもなく、風はなお冷たく吹き付けた」について、次の(1)・(2)の問いに答えよ。

- (1) 「いくら考えたところで答えの尻尾を捕まえられないはずもなく」とあるが、ここでの孝文の心情について説明した次の文の 

i
---

 ・ 

ii
----

 を指示に従って埋め、説明を完成させよ。

毛皮用のミンクを育てることは、 

i
---

 十字以内で考える ことに繋が<sup>つな</sup>がっている崇高な仕事だと思う一方、「猫の木」の話を聞いたことで、毛皮をとることは、 

ii
----

 五字以内で考える ことに繋が<sup>つな</sup>がっているということを痛感している。

- (2) ここから読み取れることとして **適当でないもの** を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 孝文は、あまりに大きな衝撃のために、頭も身体もうまく働かないでいる。  
イ 孝文は、以前のように前向きな気持ちで仕事に向き合うことができなくなってしまった。  
ウ 孝文は、「ろくでなし」という非難を認めて開き直り、冷徹な人間になってしまった。  
エ 孝文は、冷たい風もあいまって、「ろくでなし」という言葉をより厳しいものに感じている。  
オ 孝文は、久美子・修平との関係が冷え切ってしまうのではないかと心配している。

問7

……線部④～⑤について、それぞれの説明として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ④は、修平が久美子を元氣付けるために発した言葉であり、修平の心優しい性格や、互いに支え合って生きる姉弟の結束を想起させる。

イ ⑤は、久美子が「村長さん」とは異なり「ケンペイさん」についてよく分かっていないことを示す表現で、ここから久美子は教養を持ちあわせていない浅はかな人物であることが分かる。

ウ ③は、「猫の木」の話を詳しく伝えようとする久美子の姿とは対照的な、物事を断片的にしか捉えられずに独善的な態度をとる孝文の姿を浮き彫りにしている。

エ ④は、孝文が「猫の木」に類似する、戦時中の日本で実際にあった話を既に知っていたために、久美子の話に興味を失ってしまったことを表現している。

オ ⑤は、孝文自身のみならず孝文の父のことまでも、久美子やその祖母に一方的に非難されたことに対して孝文が強い怒りを覚えたことを表現している。

(このページに問題はありません)

### 三

次は、『浮世物語』の一節で、語り手が昔の人（Ⅱ「古き人」）の話を引き合いに出して「御大名」を評した部分である。この文章を読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合で表記を改めた部分がある）

「今はむかし、ある大名（注し）きはめて良き名馬をもとめて、『①我が一大事（注し）の先途（注し）見るべき物はこの馬なり』とて秘蔵せられ、馬の飼料（注し）とて、米・豆潤（注し）沢（注し）にあてがはれしに、馬飼（注し）の者、それを皆耗（注し）ぎておのれが徳（注し）とし、馬にはわづかに草の麩（注し）ともしきほどに与へて飼ひ置きぬ。案のごとく天下乱れて戦（注し）に及ぶ。『馬を秘蔵せしはこのたびの事なり』とて、かの大名くだんの馬にめされしに、馬（注し）の漢もことのほかに鈍く、はねをどるいきほひもなし。大名大（注し）に怒りて、『②かかる用にも立たぬ馬とは思ひもよらず、いたはりて飼はせることよ』とて、鞭（注し）にてさんざんに打ちければ、この馬、人のごとくに物いうて、『いかに殿もよく聞き給へ。馬飼（注し）さらに食（注し）を惜しみて、腹に飽くほど与へたる事なし。さるままに力も弱く、こころも勇まず、道も行かれず』とつげ侍り」と、古き人の語られし。

かの御大名（注し）の、家中を責めはたり、百姓をこき取り、情なくふるまひ給ふを、家中の者は、「浪人すれば、又かかへらるる事まれなり。飢ゑてさへ死なずは力及ばず」と思ひて、堪忍はいたせども、まことの一大事にのぞみて、③その御大名に思ひつかず、かの名馬のごとくに用に立たぬものとなり、押しきるべき戦場をも逃げくづして、味方の利を失はするやうにならん事、目の前に見えたれども、「④後は後、今は今、当座の徳のゆくこそよけれ」と思（注し）めすも⑤かしこしや。

(注1) 「ある大名」……「御大名」とは別の、昔の大名。

(注2) 「徳」……財産。利益。

(注3) 「馬の漢もことのほかに鈍く」……「馬は全く元気がなく」の意。

(注4) 「家中」……家臣。

問1 線部「はねをどるいきほひ」を現代仮名遣いで記せ。

問2 線部①「我が一大事の先途見るべき物はこの馬なり」とはどのような意味か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 自分が進むべき道を見失ったときに、その行く先を示してくれるのはこの馬だろう。
- イ 今後領地拡大のための戦をすると考えたときに、先陣にふさわしいのはこの馬と聞く。
- ウ 反乱が起こったときに、その見た目で相手を震え上がらせるのはこの馬に違いない。
- エ わが大名家が幕府から断絶を迫られたときに、その危機を救ってくれるのはこの馬だ。
- オ 天下が乱れ戦が起こったときに、我々の勝利を決定づけてくれるのはこの馬である。

問3

——線部②「かかる用にも立たぬ馬」とあるが、なぜこのようになったのか。その経緯を踏まえて具体的に説明せよ。

問4

——線部③「その御大名に思ひつかず、かの名馬のごとくに用に立たぬものとなり」とあるが、これについて説明した次の文章の  X  Y を指示に従って埋め、説明を完成させよ。

「その御大名に思ひつかず、かの名馬のごとくに用に立たぬものとなり」とは、家臣たちが御大名に対して  X 自分で考える を抱いていないために、「古き人」の話に出てくる名馬のように役に立たなくなるといふことであり、その原因は、  Y 次の中から最も適当なものを選び、記号で答える にある。

- ア ある大名が馬飼にしたのと同じように、御大名が家臣に俸禄ほうろくを多く与えすぎたこと
- イ 馬飼が名馬にしたのと同じように、御大名が家臣に十分な俸禄を与えていないこと
- ウ ある大名が名馬にしたのと同じように、御大名が家臣に十分な食料を与えていないこと
- エ 馬飼が名馬に抱いた思いと同じように、馬が家臣以上に食料を与えられていることへの不満
- オ 名馬がある大名に抱いた思いと同じように、わずかな食料しか与えられないことへの憎しみ

問5

――線部④「後は後、今は今」とあるが、ここから「御大名」のどのような考え方がわかるか。具体的に説明せよ。

問6

――線部⑤「かしこしや」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 語り手は、民衆を犠牲にしても財政を良くしようとする御大名の政治に対し、横暴だ、と真っ向から非難している。

イ 語り手は、財政よりも民衆の支持を重視する御大名の考えに対し、賢明だと思われる、と肯定する態度を示している。

ウ 語り手は、軍備のために厳しく徴収を続ける御大名に対し、知恵が無いのだろうか、と冷たい態度で言い放っている。

エ 語り手は、悪政を行う御大名の考えに対し、おそれ多いことよ、と言葉の上では敬っているが実は皮肉を言っている。

オ 語り手は、一見悪政に見えるが実は理にかなった政治を行う御大名に対し、恐るべき頭脳だなあ、と絶賛している。

問7

『浮世物語』は、近世（江戸時代）に成立した作品であるが、同じ近世に成立した作品を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 枕草子

イ 源氏物語

ウ 奥の細道

エ 徒然草

オ 平家物語